官能の美学か、絶望の愛か‥‥

改めて現代に問うベルトルッチ最高の傑作！

ラストタンゴ・イン・パリ

Last Tango in Paris

マーロン・ブランド/マリア・シュナイダー

監督ベルナルド・ベルトルッチ

製作 アルベルト・グリマルディ/オリジナル脚本 ベルナルド・ベルトルッチ■フランコ・アルカッリ/撮影 ビットリオ・ストラッロ
音楽 ガトー・バルビエリ/ユナイト映画UA/UIP配給

ラストタンゴ・イン・パリ Last Tango in Paris

キャスト
ポール……マーロン・ブランド
ジャンヌ……マリア・シュナイダー
トム……ジャン＝ピエール・レオ
マルセル……マッシモ・ジロッティ
ポールの義母……マリア・ミキ
メイド……カトリーヌ・アレグレ
ジュリー……ミニ・パンソン
モニク……マリー・エレーヌ

スタッフ
製　作……アルベルト・グリマルディ
監　督……ベルナルド・ベルトルッチ
オリジナル脚本…ベルナルド・ベルトルッチ
〃　……フランコ・アルカッリ
撮　影……ビットリオ・ストラッロ
美　術・フェルジナンド・スカルフィオッティ
セット……バオラ・ベルトルッチ
音　楽……ガトー・バルビエリ

ベルトルッチの最高傑作がいま甦る！

公開当時はその芸術性よりもむしろスキャンダラスな話題のみが先行していた感のあったベルナルド・ベルトルッチの最高傑作「ラストタンゴ・イン・パリ」の待望の公開だ。

今や名匠の誉も高いベルトルッチ監督も当時は気鋭の32才。「暗殺の森」(70)に次ぐこの作品で、彼はヨーロッパのみならず各国で高い評価を受けることになる。

バンド・ネオンの調べでタンゴのノスタルジックなイメージを映像に表現しつつ、ガトー・バルビエリのテナー・サックスが退廃的な官能に満ちあふれた主題として、くり返しフューチャーされる。

73年の公開時に「これはまぎれもなく、忙然とするような大傑作である」と絶賛された「ラストタンゴ・イン・パリ」は、インモラルなセックスを通じて現代の不毛化した価値観やモラルの荒廃を問いかけた問題作。作品の評価をめぐって賛否両論の中、この作品は15年間、テレビ放映もされず、ビデオにもならず、長い間多くの映画ファンにとって名のみ知られるまさに幻の傑作と呼ばれるにふさわしい作品だ。匂いたつような映像美の中で、行きずりの男と女を演じるのは「ゴッドファーザー」「地獄の黙示録」のマーロン・ブランドと「危険なめぐり逢い」のマリア・シュナイダー。老境を迎えたアカデミー賞俳優を前に、みずみずしい輝きを放つファム・ファタールを演じる彼女の役は当初ドミニク・サンダが考えられていたというが、奔放な若い娘という点ではシュナイダーが適役だろう。

格調高い映像美とそれを支える大胆な映像処理、流麗なカメラワークは、ベルトルッチ作品に欠かせないビットリオ・ストラッロ。彼はパリ中にオール・ロケを敢行、作品にドライなリアリティを与えることに成功した。

〈ストーリー〉

ある冬の朝。パリのアパートで行きずりに出会った男と女。中年の男ポール（マーロン・ブランド）と若くて奔放な娘ジャンヌ（マリア・シュナイダー）。男と女はひかれあうように導かれ、愛を確かめ合う。

ジャンヌには恋人がいた。だが彼女は、あのめくるめく愛を忘れることができなかった。再びアパートを訪れてしまうジャンヌ。だが、その空室にポールも待っていたのだ。彼はジャンヌに提案する。「この部屋にいるとき、二人は過去も未来も忘れてただの男と女でいよう」と。

ふたりは荒れ果てたアパートで貪りあうようにお互いの体を求め合う。しかし、この愛と現実の愛とのはざまにジャンヌが耐えられなくなった。

やがて彼女はポールに別れを告げる。だがポールにとってジャンヌは欠かせない存在となっていた。逃げるジャンヌを執ように追いかけるポール。恐怖にかられた彼女はついにポールを射ってしまう。死体の前でジャンヌは言う。「彼の名前は知らない……」

銀座テアトル西友1周年記念
キネカ大森4周年記念
2月下旬よりロードショー！

銀座テアトル西友
銀座1丁目（地下鉄・銀座線京橋駅下車）☎03(535)6000

連日	11:30	2:00	4:30	7:00

キネカ大森
大森駅東口・西友5階 ☎03(762)6000 自由席定員制・入替制

連日	11:30	2:00	4:30	7:00

特別鑑賞券1,200円発売中
（当日一般1,500円・学生1,300円）
特別鑑賞券は、都内各プレイガイド、チケット・セゾン、チケットぴあ、セゾン系各劇場他でお求め下さい。
グループ鑑賞のお申し込みは、㈱メイジャー ☎03(541)2508まで